

新 知 故 温

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(5) 平成12年7月15日

伊豆国の地誌(その1)

増訂豆州志稿(S210/2)

江戸時代に編さんされた伊豆国の代表的地誌である「豆州志稿」を印刷・刊行したものです。

「地誌」とは、その地域の位置・地形・気候・地名・村落・交通・産業・伝承などを記述したものです。江戸時代には多様な地誌が、幕府や藩、または在野の知識人らにより作られました。

伊豆国に関する地誌の中で比較的古いものとしては、伊東祐綱の「伊豆志」(1727年)があげられますが、大半は18世紀末以降に編さんされています。

「豆州志稿」の編者秋山富南(1723年-1808年、字は章、通称文蔵)は、田方郡中郷村安久(現三島市)の豪農の家に生まれました。富南は、生まれつき病気がちであったために学問を志し、三島神社神主矢田部氏に招かれて三島宿で漢学塾を開いていた伊藤仁斎門人並河誠所(字は五一)に入門しました。誠所は「河内志」「撰津志」「大和志」「和泉志」「山地志」の五畿内志を編さんした儒学者で、富南の地誌編さんは師誠所の影響を受けたものといえます。その後、富南は郷里において子弟の教育に努めましたが、富南を慕って遠方から学びに来る者も多かったといえます。

1793年(寛政5)、老中松平定信が海辺巡視のため伊豆を訪れます。富南はこれに影響されて伊豆国の地誌編さんを本格的に企て、知人であった葦山代官江川英毅を通じて幕府勘定所から豆州廻村の許可を得て調査を開始しました。調査は富南の他に、孫婿や弟子、測量家の五人で行われました。そして1800年(寛政12)に「豆州志稿」13巻が完成しました。この時富南は78歳。70余歳の老体で伊豆中をくまなく踏査したのですから、その労苦は並大抵のものではなかったでしょう。完成した「豆州志稿」の献上を受けた幕府は、白銀10枚を下して、その労をねぎらいました。

「豆州志稿」は、その他の多くの地誌が村落ごとに記述されるのに対し、沿革・郡郷・租税・原野・川溪・橋梁・物産・神祠・仏刹・古墳・流寓・人物といった項目別になっています。

しかし、この富南の「豆州志稿」は江戸時代に印刷・刊行されることはありませんでした。1888年(明治21)に伊豆長岡の国学者萩原正平がこの増補訂正・刊行を企て、正平の死後は嗣子正夫が父の遺志を引き継いで1892年から1895年にかけて『増訂豆州志稿』として印刷・版行しました。

当館では「豆州志稿」の写本(S210-1)も所蔵しています。

【参考資料】『豆州志稿・伊豆七島志』(S210-15)、『ふるさと百話』19(S204-15)